

強者の戦略

東大日本史のみかた 37 [解答編]

こんにちは。日本史の岡上です。さて、今回は平安時代の貴族と日記に関する問題でした。貴族の社会において前例が重視されること、またそのような前例を残すために日記が書かれたことは、日本史の学習のみならず、古典の学習などでも触れるところですので、比較的取り組みやすいテーマだったのではないかと思います。しかし、既知の知識だけで解答を仕上げてしまうと、出題の意図を理解しない内容の薄い解答になってしまいます。与えられた資料文をしっかりと読み込んで、出題者がこの問題を通して何を伝えたいのかを考えながら、解答を作成したいものですね。

それでは解説を始めていきましょう。

<平安時代の上級貴族>

設問

A この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。1行以内で述べなさい。

問われているのは、この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。「この時代」というのは、問題文から10世紀から11世紀前半だということがわかります。1行以内(=30字以内)の指定ですので、簡潔に解答をまとめたいところです。

まず注意しておきたいのは本問の主語。「貴族」ではなくわざわざ「上級貴族」とありますので、一般的な貴族ではなく、あくまで上級貴族について解答をしなければいけません。しかし、「上級貴族」といっても何を指しているのか不明瞭ですから、ここは該当する資料文を確認することにします。

(2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿^{しょうけい}」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。

(3) 藤原 顕光^{あきみつ} は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、...

資料文(2)(3)より本問でいう「上級貴族」とは、**朝廷の諸行事の責任者である「上卿」をつとめることのできる貴族である**ことが読み取れます。

では、そのような上級貴族に求められた能力は何か。こちらも資料文を確認しておきましょう。

強者の戦略

(3) 藤原 顕光^{あきみつ}は…手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例に違^{たが}う」などと評し、顕光を「至愚(たいへん愚か)」と嘲笑した。

(4) 右大臣藤原 実資^{さねすけ}は、…様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、…後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。

資料文(3)では、様々な儀式や政務において前例に違う藤原顕光は「愚か」とされ、一方資料文(4)の藤原実資は先例に通じ「賢人」と称されています。このことから、この時期の上級貴族に求められた能力とは、**責任者となった様々な儀式や政務における先例に精通し、その先例に従って滞りなく執行する能力**であるということが出来ます。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

責任者となった政務や儀式の先例に通じ、滞りなく執行する能力。(30字)

<貴族の日記>

設問

B この時期には、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような貴族の日記が多く書かれるようになった。日記が書かれた目的を4行以内で述べなさい。

問われているのは、この時期(=10世紀から11世紀前半)に、貴族の日記が書かれた理由。設問中に、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような」という一文がありますので、それに関係する資料文を読み解いていく必要があります。まずは資料文(4)を確認してみましょう。

(4) 右大臣藤原 実資^{さねすけ}は、祖父左大臣藤原 実頼^{さねより}の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。…

資料文(4)からは、藤原実資の例として、祖父実頼から日記を受け継いだこと、また実資も長年日記を記していたことが書かれています。そして、その結果として実資が「様々な儀式や政務の先例に通じていた」とあります。つまり、**実資や実頼が記していた日記の内容は「様々な儀式や政務の先例」に関わることであったことが分かります。**ちなみに資料文(1)では、

(1) 9世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。

とあり、神事・仏事などの**様々な儀式や政務が「年**

強者の戦略

中行事」として整えられ、繰り返されたことや、これらの執行手順や作法に関する先例が蓄積され、それが細かな動作にまで及ぶ、つまり具体的な行動規範のようなものになっていたことが指摘されています。ですので、貴族としてはその儀式や政務を責任者（「上卿」）として執行する際にも、またただ参加する場合においても、先例にならった行動が求められたため、それを日記に記しておくことが必要であったのです。

- (5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原もろすけ師輔は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

続いて資料文(5)でも藤原道長を例に資料文(4)と同様の内容が指摘されているようにみえます。しかし、同様の内容であればわざわざ資料文が用意されることはないはず（東大の資料文は解答作成に“過不足なく”が基本です！）。ですので、ここは注意して読み込むことが必要でしょう。そうして考えたとき、気になるのは「重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくこと」という表現です。「重要な朝廷の行事」や「天皇」に関することは、様々な儀式や政務の先例を記録する意味で日記に記載するのは当然と言えますが、それと並んで「父親に関すること」も記録しておくことに、どのような意味があるのでしょうか。

ここで、確認しておきたいのが資料文(2)の「また地位によって担当できる行事が異なっていた」という一文です。つまり、ここで考えられるのは**当時の貴族社会において、ある儀式や政務を担当する貴族の家柄が固定化されつつあったのではないか**ということ。ある儀式や政務を担当する貴族の家柄が固定化されつつあるからこそ、「父親に関するこ

と」はその子孫にとって、一番参考にすべき先例となったのではないのでしょうか。**その家が代々担当する儀式や政務において父親がどのように行動し、どんな発言をしたかなどは、後に同じ儀式や政務を担当するであろう子孫にとって、非常に重要な先例になる**わけです。また逆に言えば、ある家が日記に記された先例にならって儀式や政務を滞りなく執行することで、儀式や政務を担当する貴族の家柄の固定化が進んだということもいえるかもしれません。今回の解答では、是非このあたりを反映させておきたいと思います。

【解答例】

当時の朝廷では儀式や政務が年中行事となり、先例が蓄積された。貴族はその執行や参加に際して先例を規範とする行動が求められた一方、儀式や政務の貴族の家柄による固定化も進んでいたため、貴族は先例や父祖の言動を子孫に伝えることを目的に日記を記した。(120字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！